

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

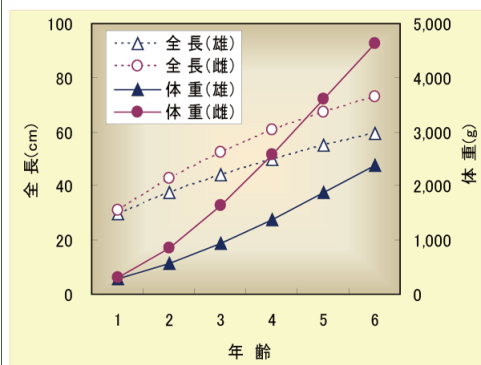
系群名 太平洋北部系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄10歳以上、雌20歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳以上、雌3歳以上
産卵期・産卵場: 5～9月(盛期6～8月)、沿岸各地の粗砂および砂礫(水深20～30m)
索餌期・索餌場: 沿岸各地の水深30m以深の陸棚
食性: 着底稚魚はアミ類、全長10cm以上は魚類やイカ類
捕食者: 着底直後の稚魚は大型魚や甲殻類

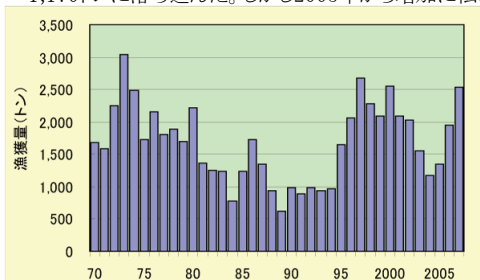


漁業の特徴

小型底びき網、刺し網、定置網、沖合底びき網等により周年漁獲されている。漁法により漁獲物の体長組成は異なるが、全般的に45cm以下(1+、2+歳)が漁獲物の大半を占める。資源保護と管理を目的とした水揚げ物の全長制限(30または35cm以上)が、各県で実施されている。また、ヒラメは高級魚であり、各県において種苗放流が盛んに行われている(2006年約446万尾)。

漁獲の動向

青森県太平洋側～茨城県における1988～1994年のヒラメの漁獲量は、1,000トン弱程度で推移していたが、1995年以降は増加傾向を示し、1997年には2,674トンに達した。その後、2000年の2,542トンをピークに減少し、2004年は1,170トンに落ち込んだ。しかし2005年から増加に転じ、2007年は2,530トン(暫定値)であった。

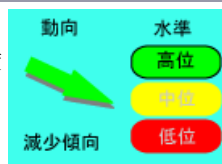
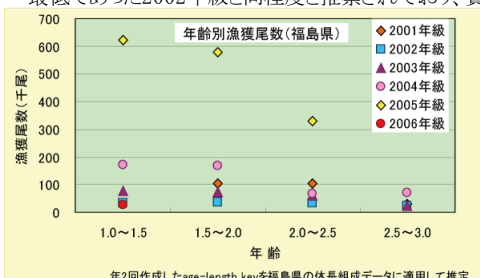


資源評価法

1990～2002年は、複数年にわたり採集した標本を用いて作成したage-length keyを用い、また、2003～2006年は半年ごとに作成したage-length keyを用いて、福島県(1990～2006漁獲年度)の水揚げデータより雌雄別年齢別漁獲尾数を算定した。この値を系群全体に引き延ばし、雌雄別のコホート解析を行い、雌雄別年齢別の資源尾数を推定した。

資源状態

1980年代後半～1990年代前半に低水準であった資源量は、1994年と1995年に発生した卓越年級により急増した。その後、2000年級までの年級群豊度は高い水準を維持していた。2000年級以降の年級群豊度は減少し、2002年級が最低となった。その後年級群豊度が増加し、2005年級の豊度は1990年代の2回の卓越年級と同レベルであると推察された。2006年の資源量は1990年代以降の最高水準であった。しかし、2006年級の豊度が近年最低であった2002年級と同程度と推察されており、資源量は今後減少すると予想される。



管理方策

1960年以降の漁獲量の推移から、10年に1度程度の頻度で発生する卓越年級によって資源量が急増し、その後数年でそれ以前の水準に戻ることを繰り返していると推察される。卓越年級の発生確率を少しでも高くすることと、卓越年級が発生しなくても漁獲量を長期にわたり中～高水準に保つために、親魚量、または繁殖成功度が高いと思われる高齢魚の資源量を一定レベル以上に維持することが重要である。5年後(2013年)の親魚量(雌のみ)が1990年以降の中位水準となることを目標として、F_{limit}を設定した。また漁獲物の全長制限は、親魚量の維持と資源の有効利用の観点から重要であると考えられるが、再放流後の生残率を評価する必要がある。

	2009年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABC _{limit}	1,140トン	F _{sim}	0.69	47%
ABC _{target}	980トン	0.8F _{sim}	0.55	40%

- 10トン未満を四捨五入
- F_{sim} = 0.81F_{current}

資源評価のまとめ

- 近年の資源水準は高位、動向は減少傾向である
- 2002年と2003年の年級群豊度は低水準、2004年級は中水準、2005年級は過去の卓越年級と同水準であった。2006年級は2002年級並みの低水準である

管理方策のまとめ

- 親魚量を維持するために、漁獲量を980トン程度にする
- 水揚げ物の全長制限を今後も維持する

資源評価は毎年更新されます。